

北投温泉を歩くーその1

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。その歴史をじっくりとたどってみよう。今回は台北郊外の温泉地、北投を取り上げてみたい。台湾最大の温泉郷であるのと同時に、かつて台北盆地に暮らしていたケタガラン族の遺跡、そして、随所に残る日本統治時代の歴史建築など、思いのほか、興味の尽きないエリアである。

硫黄採掘で知られた温泉地

北投（ほくとう）は台湾を代表する温泉郷である。交通至便で泉質も良く、さらに谷間に複数の温泉が湧いているということで、「台湾の箱根」の異名をとっていた。確かに、東京と箱根、台北と北投の位置関係は似ており、近いだけでなく、風光明媚な景勝地でもある。そして、鉄道でもバスでも気軽に訪れられる点までもが似ていた。亜熱帯性の潤い豊かな緑に包まれた出湯ということで、その名は日本本土にも知れわたっていた。

今でこそ北投は温泉地という印象が強いが、もともとは硫黄の産地として名を馳せていた。古くはスペイン人が台湾北部に出入りしていた際に、すでに調査の記録がある。その後、清国統治時代にも採掘の記録があり、1697年には郁永河（いくえいが）という人物がこの地を訪れ、硫黄を採取。現在の士林（しりん）付近で製錬を試みたという記録が残っている。さらに後、1893年にドイツ籍の商人オーリーによって硫黄の存在は大きく広められた。

なお、このオーリーという人物は台湾が日本に割譲された1895（明治28）年、北白川宮能久親王率いる近衛師団が台北入城を目前に控えた際、混乱に陥った城内の状況を伝え、日本軍の入城を請うた外国人商人の一人である。

日本統治時代に入った後、北投は大きな変化を迎える。最初に北投を訪れた日本人は1895（明治

28）年10月10日に当地を視察した角田海軍少将と仁礼台北県書記官であるとされている。同月17日には士林の国語学校開校式典に参列した水野民政局長も訪れている。さらに11月には初代台湾総督の樺山資紀（かばやますけのり）も視察している。ただし、これらはいずれも視察の域を出ず、温泉地としての開発とは無縁のものだった。

北投に最初に温泉宿を設けたのは平田源吾（ひ



日本統治時代の北投温泉の様子。風光明媚な温泉郷として広く知られていた（戦前に発行された絵はがきより）。中央に見えるのは台北州立公共浴場（現北投温泉博物館）。



北投は日本統治下の台湾でも屈指の「日本情緒」に満ちた場所だった。絵はがきなどにもそういった一面が如実に表れている。

らたげんご)という人物だった。平田は新領土である台湾で金鉱の経営を志し、基隆入港後に瑞芳(ずいほう)付近を探查したが、台湾総督府から許可を受けられず、彼の夢は破れた。また、探查中、足に怪我を負い、脚気にも罹っていたため、台北郊外の出湯の存在に惹かれたようである。

平田は1896(明治29)年の春に天狗庵(てんぐあん)という宿を開いた。この建物は石段の一部を除いて現存しないが、その歴史的価値が考慮され、古蹟の扱いとなっている。

その後、陸軍によって台北からの道路が敷設され、1900(明治33)年6月20日には淡水線の敷設工事が始まる。台北から淡水までは翌年8月25日に開通し、1916(大正5)年4月1日には北投—新北投間の支線が開通している。

縦貫鉄道全通に先立って開通した淡水線

淡水線は台北と淡水を結んでいた路線である。台湾で最初の支線であり、台北駅から淡水河に沿って23.0キロ(新北投支線を含む)を走っていた。

日本統治時代は大正街、雙連(そうれん)、圓山(まるやま)、宮の下、士林、唎哩岸(きりがん)、北投、江頭(かんとう)、竹圍(ちくい)の各駅が設けられ、北投からは温泉街の玄関口となる新北投までの支線が分岐していた。なお、現在は大正街駅と宮の下駅は廃止されており、江頭は關渡と改称されている。

淡水は水運が活発な時代、台北の外港というべき存在だった。古くは中国大陆との交易で発展を見たが、土砂の堆積などによって港湾機能は徐々に低下していく。日本統治時代に入った頃にはすでに港湾機能を失っていた。大型船の接岸が難しく、荷揚げはもっぱら基隆港が利用されるようになっていた。

北投の温泉街までは淡水線を利用するのが普通だった。ここで注目したいのは、1915(大正4)

年8月からこの路線には気動車(正しくはガソリンカー・機動車、自動客車などとも表記)が導入されていたことである。新北投までやってくる列車は一日20本に及んでいた。この時点で日中はほぼ30分おきだった。当時から「待たずに乗れる」というフリークエントサービスが実施されていたのである。

新北投支線はわずか1・2キロで、所要時間2分という盲腸線だった。しかし、ガソリンカーによる頻繁運転が実施され、台北との直通運転も行なわれていた。1937(昭和12)年の時刻表を見ると、台北駅から出る列車は半数が淡水行き、半数が新北投行きとなっておいる。30分ヘッドのパターンダイヤがこの時代に実現しているのは異例のことと言っている。当然ながら、当時の台湾ではここだけだった。

新北投駅は戦前の台湾で唯一、行き止まり式の構内配置だった。これでは機関車の付け替えはできないので、敷設当初からガソリンカーの導入が予定されていたと推測される。この時代、ガソリンカーは高価なこともあり、日本本土でも珍しい存在だった。

現在、この路線はMRT(新交通システム)淡水線として生まれ変わっている。ほぼ全線が地下、もしくは高架となっており、踏切などはない。典型的な通勤通学路線で、運転本数も多い。



現在の淡水線新北投支線。温泉地に向かう観光列車ということで、ラッピングが施されている。車内には北投を紹介する動画が放映されている。



北投駅の様子。日本統治時代は台北から新北投駅での直通列車も運行されていたが、現在はすべて北投駅で乗り換えとなる。MRT淡水線の開業時、鉄パイプを組んだようなモダンなデザインが話題となった。



日本統治時代に撮影された新北投駅の様子。台湾の終着駅の中で唯一、貨物を扱わない駅だった。台北からの運賃は19銭。基隆からは64銭、新竹から1円41銭、台中から2円82銭、高雄から6円5銭（いずれも3等。列車は台北にて乗り換え）だった。

現在の線路は従来の淡水線を廃止し、その敷地を利用したものである。つまり、列車は往時とほぼ同じ場所を走っているのだが、沿線に往時の面影を感じ取ることは非常に難しい。

温泉地としての歴史をたどる

北投には三種類の温泉が存在している。温泉街にある浴場の多くは通称「白温泉」と言われる弱酸性単純泉を引いている。これは白濁しており、硫黄の臭気がある。そして、ラジウムを含んだ「青温泉」。こちらは強酸性硫黄泉で、湯を手にくくしてみると、わずかに青みがかかっているように思える。療養効果は大きいですが、皮膚への刺激が強い

ことでも知られている。さらに、上北投と呼ばれる山間には、非常に少ないが、鉄分を多く含んだ通称「鉄の湯」があった。

日本統治時代に入った後の北投は順調に発展を続けていった。中でも契機となったのは日露戦争である。当時、ここには多くの傷痍軍人が運び込まれ、陸軍が設けた療養所で治療が施された。陸軍と北投温泉の関係は緊密で、台北と北投を結ぶ道路を建設したのは陸軍だったし、温泉街の上方にある北投民俗博物館は終戦までは佳山(かやま)旅館を名乗り、陸軍士官倶楽部として使用されていた。また、陸軍療養所の木造家屋も非公開ながら残されている。

もともと湯治の習慣を持たない台湾の人々は、温泉の存在は知っていたものの、生物の棲まない毒水として恐れていた。当然ながら、臭気を伴う温泉が人々の暮らしに入り込むこともなかった。現在の北投公園周辺は日本統治時代以前はほとんど無人地帯だったとも言われている。

一般民衆に温泉浴が知られていくのは、大正時代に入って以降のことである。1913(大正2)年に後述する台北州経営の公共浴場が設けられるまでは、温泉浴が庶民レベルまで浸透することはなかった。しかも、湯治の習慣は生活に余裕のある層に限られたものだった。

それでも1932(昭和7)年末に発行された『台湾温泉案内』によると、北投には数十軒の旅館が建ち並び、四季を問わず、湯治客で賑わっていたという。深い緑の中に旅館が点在し、いたるところで湯けむりが立ちこめていた。また、温泉旅館のみならず、鉄道部や台湾電力会社の所有する保養所のほか、地獄谷と呼ばれた源泉地の上方には別荘なども並んでいた。

また、北投は鉱産資源の存在でも知られていた。特に良質な白粘土を産することから、陶器の製造で知られていた。また、タイルの製造も盛んに行なわれていた。これは台北公会堂(現中山堂)や

台湾総督府高等法院（現司法大廈）などで用いられ、現在も見ることができる。タイルのみならず、耐火煉瓦の生産も盛んだった。現在は見る影もないが、北投は窯釜の密集地帯となっていた。

終戦を迎えると、北投の繁栄も一旦は終焉を迎える。戦時体制下、すでに温泉浴は下火となっていたが、温泉浴の習慣をもたない外省人（中国大陸出身者）が一挙に流入し、台湾の統治者として君臨するようになると、温泉地は一気に廃れていった。さらに、終戦後の経済的苦境、そして、戒嚴令という時代性は台湾の温泉から繁栄を奪い取り、多くの旅館が廃業を強いられた。

それでも、北投温泉は例外だったと言っていい。ここには「歓楽街」としての機能が終戦後にも受け継がれたからである。そして、アメリカからの援助を受けていた1950年代からは「男性天国」の様相を帯びてくる。これが高度成長期を迎えた日本人男性のものに変わっていったのは周知の事実であろう。

この歓楽街としての側面は北投温泉の歴史を見



「地獄谷」から流れ出る温泉は、五つの小さな湯滝を形成し、滝壺が露天風呂となっていた。現在の台北温泉博物館前に「第一の滝」があった。

ていく上で、見のがすことができないものである。1954年4月30日以降、北投は公娼のいる町として知られていった。これは1979年まで約20年にわたって続くことになる。これは国民党政府の政策に従ったものだが、北投には再び日本人があふれかえるようになった。この時期、北投を訪れる日本人男性は全体の約八割を占められていたという。

現在、公娼制度は廃止されており、そういった雰囲気は全く見られない。しかし、今でも「男性天国」のイメージを抱いている中高年世代の日本人はいる。実際に訪れてみると、健康的で健全なイメージの強い北投だが、こういった暗い過去も、この地が歩んできた歴史のシーンとして受け止める必要があるだろう。

上野がモデルになった公園と井村像

現在、温泉郷の中心には北投公園がある。亜熱帯特有の深い緑が生い茂り、潤いのある南国情緒が色濃く漂っている。この公園の造営は台北庁（後の台北州）長の井村大吉（いむらだいきち）という人物によって発案された。

北投公園の開園は1911（明治44）年まで遡る。まさに、北投の歩みを知る歴史の証人だが、井村は北投地区の開発を二段階に分けて考えていたようである。それはまず台北州立の公共浴場を完成させ、後に広大な公園を整備していくというもの



北投公園を俯瞰する。温泉街はこの公園の南側に多く集まっていた。加賀屋北投より撮影。

だった。公共浴場については後述するが、北投のシンボルとして現在も親しまれている。

興味深いことに、この北投公園のモデルとなったのは上野公園であった。自然地形を生かし、噴水や花壇を設けていく。たたずんでいると、たしかに似ているような雰囲気も感じ取れる。もちろん、上野公園に温泉はなく、泉源から流れ出た湯水で形成される溪谷もない。しかし、敷地全体に植物が繁茂し、高低のあるところなど、両者に共通した部分はいくつか挙げられる。

井村は1914（大正3）年に知事の職を離れ、台湾総督府民政部通信局長の地位に就いている。その後、公園内にはその偉業を顕彰するべく胸像が設けられた。1934（昭和9）年4月7日には盛大



井村大吉の胸像は現存しないが、台座は日本統治時代のものが残っている。この像の向かいにある池も戦前からあったもの。

な除幕式が行なわれている。

残念ながら、現在は井村の像を見ることはできない。戦後を迎え、台湾が中華民国の統治を受けることになると、井村像は撤去され、代わりに「台湾光復記念碑」というものが据え付けられた。これまでも述べたように、光復とは「祖国に光が戻った」という意味で、戦後、台湾において国民党政府が多用した表現である。

1965年には中華民国の国父とされる孫文の胸像が置かれるようになった。しかし、基礎となる土台の部分は日本統治時代のものが流用されている。ただ、そういった事実を伝える解説板があるわけでもなく、台座後方には戦後の銘板がはめ込まれたりしているため、訪れただけでは史実を知ることができなくなっている。

余談ながら、胸像の前には噴水池がある。これもまた日本統治時代に設けられたものである。そのデザインは旧台湾総督官邸（現台北賓館）前にあるものと同一となっている。梅の花を模したという噴水池だが、こちらも興味深いところである。

東洋随一の公共浴場

北投を代表する建築物として、北投温泉博物館の名を挙げる人は少なくない。竣工時の名称は台北州立公共浴場。英国風の雰囲気をもった洋風建築であった。北投の源泉地から流れ出た湯は溪流となってこの浴場の脇を流れていた。ここでは湯遊びが楽しめ、子供たちの遊び場となっていた。緑の中に潇洒な建物が浮かび上がる様子は、非常に美しかったという。

この博物館がオープンしたのは1998年10月31日のことである。長らく放置されていた建物を有効活用しようと地元住民が請願し、実現したケースである。

館内では温泉文化に関する展示のほか、北投地区に関する紹介が行なわれている。かつてこの一帯に暮らしていたケタガラン族のコレクションも

含め、郷土文物の数々が展示されている。さらにイベントスペースとしても機能しており、展覧会なども企画されている。屋外には音楽堂なども設けられている。

この建物の前身は日本統治時代に台北州が設けた公共浴場である。竣工は1913（大正2）年6月17日。先述した井村大吉によって公共浴場の建設が決まった。北投地区の泉源は複数存在しているが、この場合、地獄谷と呼ばれた源泉地から2115メートルもの導管が設けられていた。

建物は2階建てで、1階部分は煉瓦造りだが、2階部分は木造となっている。これはハーフティンバーと呼ばれ、台湾では大正時代から昭和初期に多く見られたスタイルである。敷地面積は700坪を誇っていた。

屋内設備も特筆される充実ぶりだった。男子用の大浴場は50名が同時に入浴できる大きさで、東アジア屈指の規模と謳われた。湯船は奥行きが9メートル、幅は6メートルあまりとなっていて、男女ともに水浴槽と温泉浴槽があった。湯量豊富で、まるでプールのような感じだったという。

温泉浴槽の最深部は1・3メートルの深さがあり、いわゆる立ち湯のスタイルだった。これは台湾においては他例を見ず、日本本土を含めても多くはない。浴槽の辺部はローマ式のオーダーが並び、外壁にはステンドグラスがはめ込まれていた。



現在は北投温泉博物館となっている旧台北州立公共浴場。公園の緑と青空のコントラストが美しい。

いずれも欧州式の大浴場を彷彿させる造りであり、特筆されるべき点となっている。

正面玄関は道路に面しており、道路からそのまま建物の2階に繋がっている。奥には畳敷きの休憩スペースがあり、ふすまで仕切られた部屋では食事や冷たい飲み物が用意されていたという。窓からは北投溪の流れと鬱蒼と生い茂る亜熱帯の植物たちを見おろせた。

皇太子も台湾行啓の際に立ち寄った

1923（大正12）年、当時、皇太子で摂政の地位にあった昭和天皇もここを訪れている。一行は4月12日に横須賀を出航し、16日に基隆に到着している。その後、27日までの間、台湾各地を巡った。この行啓は台北のみならず、新竹、台中、台



2階部には畳敷きの大広間があり、くつろぎの空間となっていた。また、北投溪を眺められるベランダもあった。



入浴はできないものの、往時の浴場はそのまま残されている。当時としては非常に珍しい欧州式浴場であった。

南、高雄、屏東（へいとう）、そして澎湖（ほうこ）島にまでおよんでいた。

皇太子が北投を訪れたのは4月25日午前のことだった。当日はあいにくの雨模様だったが、10時5分に宿泊地である台湾総督官邸（現台北賓館）を出発し、士林経由で草山（現陽明山）に向かい、13時5分に北投へ出発。北投ではこの浴場を訪れ、休息をとったと伝えられる。

一行が北投を発ったのは15時15分。わずかな時間ではあったが、北投石（ほくとうせき）の説明を受けたほか、周辺の散策も楽しんだと言われている。当然ながら、皇太子行啓に合わせて北投公園は再整備を済ませており、万全の受け入れ体制となっていた。

この皇太子行啓以降、北投温泉の名声はより広まった。これを気に旅館や別荘、保養所などが次々と建てられるようになり、1937（昭和12）年度の年間訪問者数は5万人に達している。この頃、日本人が経営する温泉旅館の数は20あまりとされるが、これに加えて台湾人経営のものが6軒あり、収容者数は台北に次いで全島2位となっていた。さらに、新北投支線の開通によって利便性も高まり、週末には日帰り入浴客も多く見られるようになったという。

郷土博物館として再生される

台湾の戦後は国民党政府による強圧政治の下、言論統制が敷かれていたのは周知の事実であろう。あくまでも「一つの中国」を標榜する中華民国政府によって、台湾はそこに組み込まれてきた。これにより、半世紀にわたって、台湾では独自の文化や歴史、そして前統治者である日本との関わりなど、そういったものが意図的に封鎖されてきた。台湾の住民は自らの郷土文化を探る自由を奪われていたのである。

その後、李登輝総統時代に急速に進んだ民主化を経て、台湾社会は確実に変化していった。これ



竣工時は東洋最大の浴場と謳われた。皇室関係者や賓客もここを訪れていた。このベランダは皇太子行啓に合わせて増築されたものの。

に正比例するように、郷土文化への関心も高まっていった。人々は自らの郷里について自由に探究できるようになり、歴史建築を保存する動きも盛んになった。

この建物は長らく遺棄され、廃墟と化していたが、1990年代前半、再び注目を集めるようになった。地域住民によって保存運動が展開されるようになり、これを受ける形で1998年に台北市がここを博物館として整備することを発表。修復工事が行なわれることになった。

現在、館内には郷土にまつわる歴史文物をはじめ、温泉浴の効能や火山についての知識など、幅広い分野にわたっての展示物がある。残念ながら、実際に入浴できる浴室がないので、温泉を体験することはできないが、建物の保存状態は良好で、多くの参観客を誇っている。週末には入場規制も実施されるほどの人気ぶりだ。日本人が持ち込んだ温泉文化が台湾でどのような発展を遂げたのか、探してみたいところである。

謎に包まれた日本式建築—梅庭遊客中心

北投温泉博物館の隣にもう一棟、日本統治時代の家屋が残されている。高い塀が建物を包み隠してしまっており、つい最近まで、この建物の存在を知る人は少なかった。長らく閉ざされていた空間で、管理者が台北市に移ってから公開され

ることはほとんどなかった。

ここは通称「梅庭」と呼ばれている。ひと目見ただけでもはっきりとわかる日本統治時代の建築物だが、その由来を記した史料や文献はなく、所有者や竣工年などの詳細を知ることは極めて難しい。戦前は個人所有の別荘だったという風聞も存在するが、推測の域を出ない。

梅庭の名は戦後に付けられたものである。ここは長らく監察院が所有していたため、その院長を務めた于右任がたびたび訪れていた。「梅庭」の名称もその頃に付されたものである。その後は民間に払い下げられ、現在は公共財産として台北市が管理している。

2006年1月16日からは改修工事が行なわれ、7ヶ月を経て装いを新たにした。木造家屋だけあって傷みは激しく、工事は当初の予定よりも大



梅庭の外観。この建物は日本統治時代末期に設けられた木造家屋である。建物の南側には北投溪の清流を眺めることができる。



屋内は広く、現在は板敷きの空間となっている。なお、門に掲げられた「梅庭」の文字は于右任の筆によるものである。

がかりなものとなった。私は縁を得て工事が始まる直前に撮影を許可されたが、修復は原型に忠実に、本来の姿を保ちながら進められていった。現在は台北市の観光案内所として使用されており、内部を観察することもできる。

この建物は戦後に何度かの増築が行なわれ、壁には彩色が施されたりしていた。屋内は戦前によく見られた和洋折衷のスタイルで、家屋の真下に防空壕が設けられているのが珍しい。また、屋根裏にも小さな部屋が設けられていた。造りとしてはやや珍しい木造家屋なので、じっくりと眺めてみたいところである。

瀧乃湯—日本式温泉銭湯と御渡渉記念碑

北投公園の脇に平屋造りの大衆浴場がある。今や日本でも数少なくなってしまった銭湯の雰囲気の色濃く漂わせた空間である。

瀧乃湯（たきのゆ）を名乗るこの浴場は、現地では誰もが知っている存在だが、残念ながら、この建物についての詳細な記録は残っていない。以前、台北市内の古書店で入手した1930（昭和5）年刊行の『台北近郊北投及び草山温泉案内』という冊子には、すでにこの名前が記載されている。しかし、竣工年月日や開業日などの情報を知るこ



瀧乃湯全景。北投温泉は台北の奥座敷であった。戦前から続く温泉銭湯は、台湾全土を見回してもここだけである。向かいの高台から眺めると、日本式の瓦屋根が存在感を示している。

とはできない。古老の話では、当時、ここは三銭で入浴できたので、地元では「三銭浴場」と呼ばれていたという。

館内は男女別に分かれている。番台の造りも日本式だ。浴室に足を踏み入ると、改めてその古さが伝わってくる。湯船に用いられたのは、北投からも遠くはない唹哩岸（きりがん）で切り出された石塊である。全体に薄暗く、決して清潔とは言えないが、日本統治時代から続いていることを知ると、感慨は禁じえない。家屋の耐久年数を考えても、このような浴場施設が残っていることは奇跡に近い。

庶民によって守られた石碑

瀧乃湯の敷地には「皇太子殿下御渡渉記念碑」と刻まれた石碑が置かれている。これは皇太子の台湾行啓時に建立されたもので、保存状態は良好だ。もちろん、皇太子はこの銭湯にやってきたのではない。先述したように、一行は北投溪を挟んだ向かいの台北州営の公共浴場を訪ねている。

石碑の横をのぞき込むと、「大正十二年四月」と記されていた。高さは148センチと、大きなものではない。周囲にも石碑の存在を知らしめるものはなく、解説板などもない。少し離れた場所から眺めると、軒先に石柱が放置されているといった様相である。

台座がなく、直接地面に埋め込まれているのは、この石碑がもともと別の場所にあったことを意味しているとも言えよう。戦後、国民党政府が日本人の建てた石碑を敵性遺産として扱ったのは周知の事実である。実際に数多くの石碑が撤去の憂き目に遭った。

古老によれば、この石碑は北投溪の畔に建てられたもので、ちょうど瀧乃湯と公共浴場の間にあったという。

やはり、この石碑も一度は倒されている。ただ、その様子をしのびなく思った人もいた。この浴場

の先代主人はその一人だった。仲間とともに夜間を狙って遺棄された石碑を運び込んだという。

主人によれば、乱暴に扱われる石碑を前に、いたたまれない気持ちになったのだという。そして、無闇矢鱈な横暴を働く外省人への不信感や、やみくもに石碑を破壊して回る行為への不快感もあった。しかし、当時は白色テロ（国民党政府による民衆弾圧）という嵐が吹き荒れており、目立つ場所に置くことはできない。

そこで、この銭湯の庭先が選ばれた。人前で裸体を晒すことを嫌う外省人は大衆浴場を好まないため、銭湯への関心は低い。つまり、ここならば、外省人官吏の目につくことが少なかったのだ。こうして、小さな石碑は古い銭湯の庭先に第二の「居場所」を得ることになった。

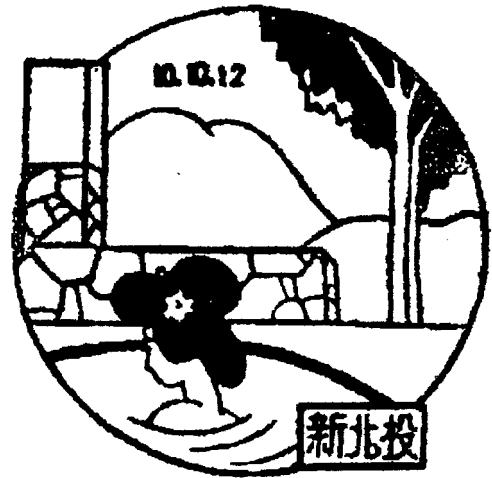
1990年代後半から起こったレジャーブームを受け、温泉は再び脚光を浴びるようになった。そして今、台湾は空前の温泉ブームに沸いている。北投温泉もその例外ではなく、スパ・リゾートを名乗る温泉旅館の建設ラッシュが続いている。2010年12月には石川県の老舗旅館・加賀屋が進



皇太子殿下御渡渉記念碑は瀧乃湯の敷地内にある。文字などを削られた形跡はなく、ほぼ原型を留めている。

出を果たし、天狗庵の跡地に「加賀屋北投」としてオープン。大きく話題となった。そんな中、日本式の銭湯が細々と営業を続けている。その様子に感慨を覚えるのは、やはり、日本人の感傷なのであろうか。

今回は北投地区にある歴史スポットと北投石について紹介してみたい。



日本統治時代の新北投駅に置かれていた記念スタンプ。温泉地らしい情緒が漂っている。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは30冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社新書)など。編著に台北生活情報誌『悠遊台湾』がある。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』(玉山社)などの著作がある。今年5月には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」~素晴らしき日本人へ』(宝島社)を手がけた。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>